HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大伴家持の「挽歌一首」考：「宇都曽美の八十伴の男」としての共感
Author(s)	原田, 直保美
Citation	国語国文研究, 159, 10-21
Issue Date	2022-08-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90703
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_159_10-21.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大伴家持の「挽歌一首」考

――「宇都曽美の八十伴の男」としての共感――

原田直保美

はじめに

『万葉集』巻十九には、「挽歌一首」と題する大伴家持が天平勝宝二年に娘聟南右大臣家藤原二郎に向けて詠んだ、その母の死を弔う歌が収められている。以下にその歌を挙げる。①

挽歌一首　并短歌

天地之　初時従　宇都曽美能　八十伴男者　大王尓　麻都呂布物
跡　定有　官尓之在者　天皇之　命　恐　夷放　國乎　治等　足
日木　山河阻　風雲尓　言者雖レ通　正不レ遇　日之累者
思繼　氣衝居尓　玉桙之　道来人之　傳言尓　吾尓語良久　波之
伎餘之　君者比来　宇良佐備弖　嘆息伊麻須　世間之　耽家口都良
家苦　開花毛　時尓宇都呂布　宇都勢美毛　无常阿里家利
足千根之　御母之命　何如可毛　時之波将レ有乎　真鏡　見礼杼
母不レ飽　珠緒之　惜盛尓　立霧之　失去如久　置露之
消去之如　玉藻成　靡許伊臥　逝水之　留不得常　狂言哉
人之云都流　逆言乎　人之告都流　梓弓　爪弦夜音之　遠音尓毛
聞者悲弥　庭多豆水　流涕　留可祢都母　（19・四二一四）

反歌二首

遠音毛　君之痛念跡　聞都礼婆　哭耳所レ泣　相念吾者　（四二一五）
世間之　无レ常事者　知良牟乎　情盡莫　大夫尓之氐　（四二一六）

右、大伴宿祢家持弔下聟南右大臣家藤原二郎之喪二慈母一患上也。
五月廿七日

この歌が詠まれた当時家持は越中に国守として赴任しており、左注によれば「聟の藤原二郎②の慈母を喪ひつる患へを弔ふ」ために詠まれたものであるという。だが、長歌冒頭「天地の初めの時ゆ」以

下「国を治むと」まで「弔」には直接かかわらない家持自身の越中赴任に至る経緯が十二句にわたって詠まれている。都から遠く離れた越中で訃報を知った悲しみを詠むためとはいえ、弔問の歌でありながら、なぜ聟には既知であるはずの赴任の経緯を語るために、このように多くの句を費やす必要があったのだろうか。

さらに、この冒頭部には「宇都曽美の八十伴の男」という『万葉集』唯一の歌句がある。青木生子『万葉集全注巻第十九』が指摘するように、家持は内舎人時代の歌から「もののふの八十伴の男」という句を「愛用」（3・四七八、17・三九九一など六例）しており、「うつそみの八十伴の男」と詠まれているのは当該歌のみである。また、「うつそみ」についても、『万葉集』ではすべて仮名書きの六例のみで、四十例ほどの「うつせみ」と比較しても多くはない。その内訳は当該歌以外では、大伯皇女の挽歌一六五歌の一例、人麻呂の挽歌に四例となっており、『万葉集』第二期以前に偏在している。奥村紀一[3]は「うつそみ」「うつせみ」の原義について、『古事記[4]』下巻で雄略天皇が「葛城之一言主大神」に対して「恐し、我が大神。宇都志意美に有れば、覚らず」と自身を「うつしおみ」と認識していることを根拠として、現世において神に仕える「現し臣（うつおみ）」という意味であり、「古代人が自己の位相を神と対比して認識した原初的人間規定」であるとする。そのうえで当該歌の「宇都曽美の八十伴の男」についても「うつそみ」が「大王にまつろふ」という意味で、「天皇を神として『現し臣』がこれに仕えるという原義的用法になっている」と説く。その一方で、その間に「八十伴の男」があることについて、家持は人麻呂歌の「宇都曽臣」という表記から、「ウツソミ」と「臣」とに「何らかの意味的関連がある」ことを感じ取り、この「臣」と縁語になる「八十伴の男」に冠するために「うつそみ」を採用したのであり、「原義のよく分からぬまま『臣』の感じだけを頼りに古形を模倣したのであろう」とも述べている。家持の他の用例はすべて「神」・「天皇」・「故人」といった現世を超越した存在と「対照させられていない」、「うつせみ」であること、「挽歌一首」長歌の後出例でも「うつせみ」が用いられていることもその根拠となっている。

だが、奥村論が根拠とする長歌後出例では「宇都勢美」と仮名書きされており、家持が当該歌において「うつそみ」と「うつせみ」とを意識的に区別して用いようとしていたことは明確である。また、後出の「宇都勢美」は無常にも亡くなった藤原二郎の慈母についての使者の伝言部分にあり、「宇都曽美の八十伴の男」、つまり官人たちの宿命を詠んだ冒頭部分とはその対象が異なることも看過できない。よって、本稿では聟への「弔」を目的として詠まれた「挽歌一首」において、なぜ「宇都曽美の八十伴の男」という独自の表現を用いながら家持自身の越中赴任の経緯を述べるために多くの句が費やされているのか、それが聟に伝えようとした「弔」の内容とどう関連するのかについて考えてみたい。

Ⅰ　「宇都曽美の八十伴の男」としての越中赴任

まずは、長歌冒頭の越中赴任の経緯について十二句にわたって詠まれている部分の表現について確認したい。

天地の　初めの時ゆ　宇都曽美の　八十伴の男は　大君に　ま
つろふものと　定まれる　官にしあれば　大君の　命恐み　鄙
離る　国を治むと　……

ここでは「天地の初めの時」から「宇都曽美の八十伴の男」には「大君」に奉仕・服従するよう定められた「官（つかさ）」、職掌があることが詠まれ、その自覚を持って「大君の命」、天皇の命令を恐れ慎んで「鄙離る国を治」めるために越中に赴任したことが詠まれている。

では、なぜこのような家持自身の赴任の経緯を詠む文脈において、「宇都曽美の八十伴の男」という独自の表現が用いられているのであろうか。前述したように「八十伴の男」は家持が好んで用いた歌句だが、当該歌以外の例では、すべて「もののふの」が冠せられている。越中赴任以前の内舎人時代に詠まれた安積皇子挽歌においても、

かけまくも　あやに恐し　我が大君　皇子の命　もののふの
八十伴の男を　召し集へ　あどもひたまひ　朝狩に　鹿猪踏み
起こし　夕狩に　鶉雉踏み立て　……　（3・四七八）

といったように、安積皇子が狩に招集し率いた多くの官人たちについて「もののふの八十伴の男」と詠んでいる。この句の「愛用」は越中時代以降[5]顕著である。

……　もののふの　八十伴の男を　まつろへの　向けのまにま
に　老人も　女童も　しが願ふ　心足らひに　撫でたまひ　治
めたまへば　……　（18・四〇九四）

では、「もののふの八十伴の男」を命令どおり服従させる天皇の行動が「まつろへの向けのまにまに」と詠まれている。また、以下の例においても、

……　もののふの　八十伴の男も　己が負へる　己が名負ひて
大君の　任けのまにまに　この川の　絶ゆることなく　この山
の　いや継ぎ継ぎに　かくしこそ　仕へ奉らめ　いや遠長に
（18・四〇九八）

といったように、「八十伴の男」がそれぞれの家名を負って天皇の命ずるままに、吉野の山川のように末永く仕えようとする決意が詠まれている。また、

……　やすみしし　我が大君の　神ながら　思ほしめして　豊
の宴　見す今日の日は　もののふの　八十伴の男の　島山に
赤る橘　うずに刺し　紐解き放けて　千歳寿き　寿きとよもし
ゑらゑらに　仕へ奉るを　見るが貴さ　（19・四二六六）

においても、天皇の御代を千年と願う官人たちが集う様の「貴さ」が詠まれている。

以上の例から、「もののふの八十伴の男」には、天皇や皇子の命じられるままに忠実に行動することが官人として名誉であるという家持の理想が現れているといえよう。[6]よって、「天地の初めの時」から天皇の命に従うことが「八十伴の男」に定められた職掌であることを詠む当該歌冒頭においても「もののふの」が冠せられても不思議ではない。それにもかかわらず、なぜ当該歌では「宇都曽美の八十伴の男」と詠まれているのであろうか。その手がかりとなるのが、冒頭部にある「大君の命恐み」という表現である。小野寛[7]は、家持歌において自身が天皇の命令に従う自ことを詠む場合は通常、

天離る　鄙治めにと　大君の　任けのまにまに　出でて来し

我を送ると　……　（17・三九五七）

といったように「大君の任けのまにまに」を用いることを指摘し、[8]「みずから天皇の代言者であると意識し、天皇に代わって天皇の意志を行ってゆくのだという誇り」が現れていると説く。これに対して当該歌では越中赴任にかかわる天皇の命令について「大君の命恐み」と表現している。この表現は、

大君の　命恐み　磯に触り　海原渡る　父母を置きて　（20・四三二八）

をはじめとした防人歌に頻出し、家持作「防人が情の為に思ひを陳べて作る歌一首」でも

大君の　命恐み　妻別れ　悲しくはあれど　ますらをの　心振り起こし　取り装ひ……　（20・四三九八）[9]

といったように防人を主語として用いられているため、小野論[10]は「絶対服従の精神」、「天皇のおことばを恐れ多いと思い、天皇のみ心のままに従うこと」を意味すると述べ、「積極的」に天皇の命に応じる姿勢が示されている「大君の任けのまにまに」とは異なる精神があると説く。家持が防人歌以外でこの表現を用いたのは当該歌と、「恋緒を述ぶる歌一首」である。小野論が「心弱くさせた」と述べるように、この歌の主題は都にいる妻への恋情である。それを反映し、

大君の　命恐み　あしひきの　山越え野行き　天離る　鄙治めにと　別れ来し　その　日の極み　あらたまの　年行き反り　……　（17・三九七八）

という冒頭表現では、越中への赴任、つまり妻との別離が自ら望んだものではなく、天皇の命に従ったものであることを強調するために、「大君の命恐み」が用いられていると考えられる。

このことをふまえると、当該歌の「大君の命恐み」にも、この越中赴任が自らの積極的な意志でなかったことが示されていると推測できる。それは、この後長歌において、越中では直に逢えない日が続いているため聟のことを恋しく思いながら過ごしていること、さらには藤原二郎の母の訃報に対し、直接弔問できないことへの嘆きが結末部で「遠音にも聞けば悲しみにはたづみ流るる涙留めかねつも」と表現されていることと相応するものであり、それは都にいる妻への恋情を主題とした「恋緒を述ぶる歌」の様相と類似する。このような「挽歌一首」に見られる越中での都の人々への恋しさを詠む文脈に合わせて、「積極的」に天皇の命に応じる姿勢が示されている「もののふの八十伴の男」ではなく、「宇都曽美の八十伴の男」という当該歌独自の句が生み出されたと考えられる。以上をふまえ、次節では「うつそみ」の原義に着目して、なぜ、「八十伴の男」に「宇都曽美の」が冠せられたのかを考えてみる。

Ⅱ　「宇都曽美の八十伴の男」と「宇都勢美」の対比

前述したように奥村論[11]は、「うつそみ」・「うつせみ」について「神のこの世の臣下」という「現し臣（うつおみ）」が原義であると解釈し、「古代人が自己の位相を神と対比して認識した原初的人間規定」と説く。『万葉集』の例としては、

・香具山は　畝傍ををしと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくにあるらし　古も　然にあれこそ　虚蟬も　妻を　争ふらしき

（1・一三）

・空蟬し　神に堪へねば　離れ居て　朝嘆く君　離り居て　我が
　恋ふる君　……　（2・一五〇）

と詠む二首について、「『神』という語を明示して、これとその臣下たる人間『うつせみ』を対照させた例」であり、「典型的な原義的用法」であると説いている。一方、「宇都曽美の八十伴の男」と同様に「うつそみ」を用いている、

宇都曽見の　人なる我や　明日よりは　二上山を　弟と我が
　見む　（2・一六五）

という大伯皇女の挽歌についても「幽界に神上りせし大津皇子を明確に意識しつつ、これと対照させて、顕界の自分を『現し臣の人』」と詠んでいると説く。つまり、一六五歌では「神」という語は明示されていないものの、死者を神の世界に属する存在と認識し、それとは異なる世界にいる自分を対比する認識が「うつそみ」に反映されていると考えられる。また、以下に挙げる人麻呂歌の「うつそみ」もすべて挽歌で用いられている。

1．……　宜しき君が　朝宮を　忘れたまふや　夕宮を　背きたまふや　宇都曽臣と　思ひし時に　春へには　花折りかざし　秋立てば　もみち葉かざし　……　（2・一九六）

2．宇都曽臣と　思ひし時に　取り持ちて　我が二人見し　走り出の　堤に立てる　槻の木の　……　（2・二一〇、一云）

3．宇都曽臣と　思ひし時に　たづさはり　我が二人見し　出で立ちの　百足る槻の木　……　（2・二一三）

4．……　岩根さくみて　なづみ来し　良けくもぞなき　宇都曽臣と　思ひし妹が　灰にていませば　（2・二一三）

1は「明日香皇女挽歌」、その他は亡妻挽歌の「泣血哀慟歌」であり、いずれも亡き人の生前の回想において、「うつそみ」が「現世の人」という意味で用いられていると解釈されてきた。だが、奥村論は人麻呂の「うつそみ」・「うつせみ」には天皇を「現人神」として、人々は「かたじけなくも神の『現し臣』たりえて生きている」という認識があり、故人の生前は人麻呂自身と共に「神（＝天皇）この世の臣下」と意識されていたと説く。

一方、鉄野昌弘[12]は「うつしおみ」の構成要素となっている形容詞「うつし」について検証し、その基本的意義は「神の世界・幽界に対立する、現実の人間界」にあるとする。そのうえで『万葉集』では、

高山と　海とこそば　山ながら　かくも現しく　海ながら
　然真ならめ　人は花ものそ　うつせみ世人　（13・三三三二）

といった例に見られるように、「うつし」は「現実に把握しうることの確かさに対する信頼を表現している」と説く。また鉄野論は家持の例として次の例を挙げ、

偽りも　似付きてそする　打布も　まこと我妹子　我に恋ひ
　めや　（4・七七一）

この歌の「うつし」について「偽りでない、正真正銘である」という意味であると説く。この解釈を進めて考えると、この歌は「大嬢から、逢えなくて恋しい、というような内容の歌が贈られて来たのに答えたもの」（木下正俊『万葉集全注巻第四』）と考えられ、次の歌、

夢にだに　見えむと我は　ほどけども　相し思はねば　うべ見

えざらむ　　（4・七七二）

から察するに、大嬢が夢にさえ現れてくれない現実があるからこそ、手紙の文言は「偽り」で、「うつし」、つまり大嬢の本心への疑いとなって傍線部のように詠まれていると考えられる。また、同じく家持の例、

……　木の暗の　四月し立てば　夜隠りに　鳴くほととぎす
古ゆ　語り継ぎつる　うぐひすの　宇都之真子かも　……
（19・四一六六）

において、ほととぎすは「正真正銘」の鶯の「子」ではないにもかかわらず、「うつし真子」と詠まれている。これらの例を見ると、家持にとっては自身が把握している実際の状況こそが「うつし」であり、真実と認識される対象だったと考えられる。鉄野論が説くように、「現実に把握しうることの確かさに対する信頼」こそが「うつし」だったのであり、このような認識が「うつし」＋「臣」を語源とする「うつそみ」を冠した「八十伴の男」にも反映しているのではないだろうか。

前述したように奥村論は「宇都曽美の八十伴の男」について、1～4の人麻呂歌の「宇都曽臣」の用例の影響を受け「ウツソミの『臣』と縁語になる『八十伴の男』に冠するために特に『うつそみ』という語形を採用した」ものの、原義はよくわからないまま「古形を模倣したのであろう」と述べている。だが、そうであるならばなぜ、縁語であることが明確になるように当該歌でも人麻呂歌と同様の「宇都曽臣」という表記を用いなかったのかという疑問も残る。したがって、家持が「うつそみ」という「うつせみ」の古形を用いるにあたっては、1～4の人麻呂の例だけではなく、大伯皇女の一六五歌も念頭にあったと考えられる。鉄野論は、大伯皇女の一六五歌も例に挙げて、人麻呂以前の「うつそみ」「うつせみ」は「神の世界や幽界に対する従属感、限界意識を伴う一方、後代のウツセミのような無常感を持たない」ことを指摘している。たしかに、家持の「うつせみ」の例をみてみると、そのような特徴がある。初出例は「朔移りて後に、秋風を悲嘆して家持が作る歌一首」と題された「亡妾」を悼む歌である。

虚蟬の　世は常なしと　知るものを　秋風寒み　偲びつるかも
（3・四六五）

とある、この歌において「うつせみの」は「世」に冠せられた枕詞であるが、「常なし」という無常観につなげられ、「虚蟬」という表記からもうかがえるように、人の世のはかなさを意味する表現ともなっている。同じく「亡妾」を悼む長歌においても、

……　打蟬の　借れる身なれば　露霜の　消ぬるがごとく
あしひきの　山路をさして　入り日なす　隠りにしかば　……
（3・四六六）

と、はかない現世の人の存在を示す「借れる身」という語の枕詞として用いられている。

一方、「うつせみ」を単独の名詞として用いた例で、新沢典子によって当該歌に「近似した表現が目立つ」[13]ことが指摘されている「世間の無常を悲しぶる歌」では、

……　春されば　花咲きにほひ　秋付けば　露霜負ひて　風交じり　黄葉散りけり　宇都勢美も　かくのみならし　紅の

色もうつろひ　ぬばたまの　黒髪変はり……　（19・四一六〇）

といったように、現世の人という意味で用いられた「うつせみ」は春から秋への植物のうつろいに譬えられる無常な存在であり、その反歌においても、

宇都世美の　常なき見れば　世間に　心付けずて　思ふ日そ
多き〈一に云ふ「嘆く日そ多き」〉　（四一六二）

といったように「常なき」存在として詠まれている。当該歌でもこの歌を要約したように、

……　世間の　憂けく辛けく　咲く花も　時にうつろふ　宇都勢美も　常なくありけり……　（四二一四）

と、「咲く花」の移ろいに「うつせみ」が譬えられ、無常ではかない存在であると詠まれている。さらに、

宇都世美は　数なき身なり　山川の　さやけき見つつ　道を尋ねな　（20・四四六八）

では「うつせみ」は物の数にも入らない存在として詠まれ、仏道を求める厭世的な気持ちの表明にも至っている。また、

・宇都世美は　恋を繁みと　春まけて　思ひ繁けば　引き攀ぢて　折りも折らずも……　（19・四一八五）
・天離る　鄙としあれば　そこここも　同じ心そ　家離り　年の経ぬれば　宇都勢美は　物思繁し　そこ故に　心なぐさに……　（四一八九）

といった例からは、「うつせみ」は恋や物思いが絶えない存在としても詠まれている。これらの例を見ると、家持にとって「うつせみ」ははかない存在、「無常」で、悩み多き存在として認識されていることがわかる。だからこそ、四一六〇歌のように「悲」の対象となり、世俗のことには「心付けずて」（四一六二）、あまり心を染めずにいたいと思い、さらには四四六八歌のような厭世的な思いにもつながっている。

また、天皇に仕える立場である防人について詠んだ歌では、

……　宇都世美の　世の人なれば　たまきはる　命も知らず海原の　恐き道を　島伝ひ　い漕ぎ渡りて……　（20・四四〇八）

と詠まれ、「厳しい現実社会の制度に抗しがたいこと」（『新全集』）について、「うつせみの世の人なれば」と詠まれている。ここでは、単に人の世のはかなさを示しているだけではなく、「大君の任けのまにまに」従わざるを得ない防人の立場の弱さを表現している。また、

いにしへに　ありけるわざの　くすばしき　事と言ひ継ぐ　千沼壮士　菟原壮士の　宇都勢美の　名を争ふと　たまきはる命も捨てて　争ひに　妻問ひしける……　（19・四二一一）

では「名」、つまり「名誉」にかかっており、「現世の」という意味が認められる。しかし、命をかけて名誉を争った結果、処女が自殺し、その後を追って二人の壮士も自死してしまう史実を知っているからこそ「うつせみの名」と詠まれているのであり、この例にも無常観が反映されているといえよう。つまり、後代の例は「無常感」を持つと鉄野論が指摘していたように、家持の「うつせみ」の例にもすべて無常観が反映されており、このような「うつせみ」の使用状況から、やはり当該歌冒頭では明確に「うつせみ」とは異なる表

現性を持つ語として意図的に「うつそみ」は用いられていると考えるのが妥当であろう。さらに、前述した「うつし」の用例をふまえると、家持は、この時代の「うつせみ」が持つはかなさや、無常観といった意味から明確に切り離して、天地開闢からの正真正銘の天皇の臣下である「宇都曽美の八十伴の男」の存在を示したかったと考えられる。家持にとっては、都に恋しい対象を残しながらも、私情を捨て大君のために越中に赴任してきた自身の行為こそが家持が把握している現実であり、それこそが「宇都曽美」、つまり、「正真正銘」の「八十伴の男」だと認識していたと考えられる。そのような存在は決して、「数なき身」ではなく、はかない存在ではないという矜持がこの使い分けには現れているのである。

その「宇都曽美の八十伴の男」は、人麻呂以前の例に見られたような「神の世界・幽界に対立する、現実の人間界」（前掲鉄野論）に属する存在である。当該歌において、そのような対立概念が詠まれた契機は、藤原二郎の母の死であったと考えられ、その点は大伯皇女の一六五歌や人麻呂の例と同様である。しかし、一六五歌が自身のことを「宇都曽見の人なる我」と認識し、人麻呂の例では「現世」全般を捉えた表現であるのに対し、当該歌では大君に仕える者としての定めを負った「宇都曽美の八十伴の男」として現世の自らを認識していることも看過できない。なぜ母を失った智への私的な「弔」が目的の当該歌において、大君に仕える「宇都曽美の八十伴の男」といった現世の存在を超えた「神の世界・幽界に」ある者との対比を示す表現を用いる必要があったのであろうか。その鍵となるのが智に対して、慈母の死を「世間」の無常として、だからこそ「心尽くすな」と執着することなく、「ますらを」――官人としての自覚を促そうとしている第二反歌である。次節では第二反歌の「ますらを」という歌句に着目して長歌冒頭との関連を考えたい。

Ⅲ　第二反歌の「ますらを」

「挽歌一首」第一反歌では、「相思ふ我」という表現から、人の「伝言」で聞いた智の嘆きに共感し、泣いていることが詠まれ、おおむね長歌の内容を反復、要約した内容となっている。一方、第二反歌では、慈母の死について、「世間の常なきこと」と客観視し、「ますらを」であるのだからそれに対して執着すべきでないと詠んでいる。この第二反歌について『釈注』は、「ともに泣くこれまでの姿勢から一挙に転じ、相手を叱咤激励」し、「父親としての立場がにじみ出ている」と説く。だが、第二節で検証した「宇都曽美の八十伴の男」という独自表現に込められた天皇に仕える者としての認識をふまえると、単に「父親としての立場」だけでこの「叱咤激励」が詠まれているのではないと考える。そのことをうかがわせる表現として結句の「ますらを」という表現に着目したい。

「ますらを」は「大夫」「健男」といった表記が示すように元来は「心身共に立派で堂々たる男子」という意味を持ち「官僚たちの自意識を表出する言葉」（伊藤博『万葉集全注巻第十八』）である。また、小松靖彦[14]は、家持の「ますらを」用例の中で「ますらをの心」という表現に着目し、

……　ますらをの　心振り起こし　剣大刀　腰に取り佩き　梓

弓　靫取り負ひて　天地と　いや遠長に　万代に　かくしもがもと　……　（3・四七八）

・ますらをの　心思ほゆ　大君の　命の幸を　聞けば貴み　（18・四〇九五）

といった例に見られるように、「家持以前にはなかった〝武人として天皇に仕へる覚悟〟を表した」と説く。たしかに、「安積皇子挽歌」の四七八歌では「ますらを」の心を奮い立たせて皇子に武人の一員として末永く仕えようとしていた舎人たちの決意が具体的な行動として詠まれている。また、「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一首」の反歌である四〇九五歌で示された「ますらをの心」は長歌において、

……　大伴の遠つ神祖の　その名をば　大来目主と　負ひ持ちて　仕へし官　海行かば　水漬く屍　山行かば草生す屍　大君の　辺にこそ死なめ　かへり見は　せじと言立て　ますらをの　清きその名を　古よ　今の現に　流さへる　親の子どもそ　大伴と　佐伯の氏は　人の祖の　立つる言立て　人の子は　祖の名絶たず　大君に　まつろふものと　言ひ継げる　言の官そ　……　（18・四〇九四）

と詠まれ、傍線部では大伴氏の神祖から「大来目主」と呼ばれ天皇に奉仕する職掌をもち、海や山で屍をさらしても天皇の傍らで死のう、後悔はしない、と誓ったことが「ますらを」に象徴されている。

このような天皇や皇族への忠誠心や大伴家の職掌である武門に対する意識は越中赴任以降の用例で顕著となっている。「悲緒を申ぶる一首」においても、

大君の　任けのまにまに　ますらをの　心振り起こし　あしひきの　山坂越えて　天ざかる　鄙に下り来　……　（17・三九六二）

と、天皇の命に従って「ますらをの心」を奮い立たせて越中に赴任したことが詠まれている。この歌において「大君の任けのまにまに」に続くのは、「ますらをの心振り起こし」であり、「ますらを」は「心」、つまりその精神性がまずは重要で、「大君の任けのまにまに」という文脈から考えると、「ますらを」とは天皇・皇族への忠誠心を持ち、その命令のままに行動する存在であるという認識が家持にあったといえよう。このような天皇や皇族への忠誠心は、前掲の四〇九四、四〇九五にも見られ、後者では天皇の仰せを承った臣下としての栄誉を「ますらをの心」と認識している。『新全集』では、

一三詔に名ざしで家の名誉を称揚され、またそれが発布された四月一日に家持自身も従五位下から従五位上に昇進したこともあって、誇らしい気持になり、マスラヲとはかくあるべきものだと思って言ったのであろう。

と述べられており、「ますらを」は武門の代表たる大伴家の一員であることへの家持の誇りと理想を象徴する語だと考えられる。また、

……　露霜の　秋に至れば　野も多に　鳥集けりと　ますらをの　伴誘ひて　鷹はしも　あまたあれども　矢形尾の　我が大黒に［大黒といふは蒼鷹の名なり］　……（17・四〇一一）

では、「ますらをの伴」が「越」において鷹狩りをする様子が詠まれている。下田忠[15]が「『ますらを』としての自覚を基底に詠まれた歌」と述べるように「大君の遠の朝廷」である「越」において鷹狩をす

る「ますらをの伴」を詠んだ根底にあるのもやはり天皇への忠誠心であろう。[16] さらに、「挽歌一首」と同じ年の三月に詠まれた「勇士の名を振るはむことを慕ふ歌」では、

ちちの実の　父の命　ははそ葉の　母の命　凡ろかに　心尽くして　思ふらむ　その子なれやも　ますらをや　空しくあるべき　梓弓　末振り起こし　投矢持ち　千尋射渡し　剣大刀腰に取り佩き　あしひきの　八つ峰踏み越え　さしまくる　心障らず　後の代の　語り継ぐべく　名を立つべしも

（19・四一六四）

といったように、「ますらを」は空しく人生を送るべきではなく、傍線部のように武人として奉仕し、後世に語り継がれるような名を立てるべきだと詠んでいる。また、「族を喩す歌一首」においても、

……　おぼろかに　心思ひて　空言も　祖の名絶つな　大伴の氏と名に負へる　ますらをの伴

（20・四四六五）

と詠まれ、この「ますらを」についても、市瀬雅之[17]が指摘するような家持の「氏族意識を強く反映するもの」といえよう。このような天皇に仕える武人としての理想については、大伴家や自身のことに限らず、

・……　大君の　命のまにま　ますらをの　心を持ちて　あり巡り　事し終はらば　障まはず　帰り来ませと　……

（20・四三三一／追ひて防人が別れを悲しぶる心を痛みて作る歌）

・大君の　命恐み　妻別れ　悲しくはあれど　ますらをの　心振り起こし　取り装ひ　門出をすれば　たらちねの　母掻き撫で　……

（20・四三九八／防人が情の為に思ひを陳べて作る歌）

といった防人の立場になって詠んだ歌でも傍線部のように「大君の命」に従って「ますらをの心」を持って任地に向かう防人の姿が詠まれており、ここにも天皇の武人としての家持の理想が反映しているといえよう。よって、藤原二郎は厳密には大伴氏ではないものの、家持は聟に対して天皇・皇族への忠誠心を持ち、その命令のままに行動する官人としての覚悟を再認識させようとしていたのではないだろうか。さらに、『万葉集全注巻第十九』が第二反歌について、

この歌はうつせみの無常を悲しむ家持自身の心の対処を何らかしのばせているともみられる。いうなれば、かの「うつせみの常なき見れば世間に心つけずて思ふ日そ多き」（四一六二）からさらに「心尽すな」と進展させる心意を、自らにも言いきかせているふしがうかがえようか。

と説くように、結句についても、聟に「ますらを」としての自覚を呼び起こそうとしながら、同時に家持自身にも「ますらを」であることを再認識させ、「言いきかせ」ているとも考えられる。加えて、そのような「ますらを」のあるべき姿を具体的に示しているのが長歌冒頭の「天地の初めの時ゆ」から「国を治むと」までの十二句であると考えられる。つまり、「ますらを」と直接対応する表現が「宇都曽美の八十伴の男」であり、家持は天地開闢から「大君に」奉仕するものと定められた「宇都曽美の八十伴の男」の役割として、越中に赴任した自身の現状を改めて詠むことによって、聟に官人としての在り方を示しているのである。長歌において、「直に逢はぬ日の重なれば思ひ恋ひ息づき居るに」と詠まれている越中での家持の

日常は、母を失い嘆いている聟の姿とも重なる。だからこそ、第一反歌では、「相思ふ我は」と悲しみへの共感を示した一方で、「宇都曽美の八十伴の男」、「ますらを」の一員として、共にこの現世において、名誉ある天皇の臣下であるという自覚を取り戻そうと、越中から叱咤激励しているのである。

まとめ

以上、本稿では聟への「弔」を目的として詠まれた「挽歌一首」において、なぜ「宇都曽美の八十伴の男」という独自の表現を用いながら家持自身の越中赴任の経緯を述べるために多くの句が費やされているのか、それが聟への「弔」の内容とどう関連するのかについて考えてきた。このことについて簡単にまとめると、「挽歌一首」は、母を失った娘聟藤原二郎を弔うという私的な目的を契機としながらも、最終的には天皇の「宇都曽美の八十伴の男」、さらには「ますらを」としての自覚を娘聟に再認識させ、そういった公的な立場への共感を伝えることを目的とした歌であったといえる。その目的、つまり、聟に官人としての自覚を呼び起こすために必要だったのが長歌冒頭「宇都曽美の八十伴の男」の宿命として十二句にわたって詠まれる家持の越中赴任の経緯であった。その中で「現し臣」を原義とする「宇都曽美」を「八十伴の男」に冠したのは、はかなさや無常観を帯びた「宇都勢美」という語と明確に使い分けるためであり、当該歌の「宇都曽美」にも大伯皇女や人麻呂の歌の例に見られたような、「神の世界や幽界に対する従属感、限界意識[18]」が見られる。そのような神の世界・幽界に対立するものとして、現世の官人である自身を意識した契機は聟の母の死であり、私的な聟の「患」への共感を契機としながらも、「宇都曽美の八十伴の男」の定められた「司」――職掌として、自身の越中赴任の経緯を詠む長歌冒頭は、第二反歌末尾の「ますらをにして」と呼応し、天皇に仕える官人としての共感を呼び起こす構造となっている。家持にとって、自身の越中赴任こそが現前とした事実である「うつし」であり、天皇に仕えるものとしてての理想とする行動であった。それを長歌で示し、第二反歌で官人としての自負を再認識することを聟と自身に促しつつ共感することが「挽歌一首」の「弔」の形であった。

注

① 本文の引用は『塙版　CD―ROM万葉集』による。所々私に改めた。

② 「藤原二郎」については、仲麻呂の次男、久須麻呂説と豊成の次男継縄説があるが、本稿では人物の比定については問題としない。藤原茂樹「藤原二郎の慈母への挽歌」（『セミナー万葉の歌人と作品九』二〇〇三年七月）に詳しい。

③ 「『うつせみ』の原義」『国語国文』五二―一一、一九八三年一一月

④ 『古事記』の引用は『新編日本古典文学全集1古事記』による。

⑤ 17・三九九一、18・四〇九四、四〇九八、19・四二五四、四二六六。

⑥ 越中赴任後の「布勢の水海に遊覧する賦一首」では、

ものの ふの　八十伴の男の　思ふどち　心遣らむと　馬並めて　うちくちぶりの　白波の　荒磯に寄する渋谿の　崎たもとほり　……（17・三九九一）

といったように、天皇とのかかわりについては直接詠まれていないものの、越中赴任そのものが天皇の命に従ったものであるという矜持で用いられていると考えられる。

⑦ 「大君の任のまにまに――家持の『ますらを』の発想――」『万葉の発想』一九七七年五月

⑧ 他17・三九六二、三九六九。

⑨ ほかに、「防人が別れを悲しぶるの情を陳ぶる歌一首」（20・四四〇八）にも見られる。

⑩ 注⑦論文。

⑪ 注③論文。

⑫ 「人麻呂泣血哀慟歌の異伝と本文――『宇都曽臣』と『打蟬』――」『万葉』一四一、一九九二年一月）

⑬ 「大伴家持作『挽歌一首』の表現と主題――『玉藻なす　なびき臥い伏し』をめぐって――」鶴見大学紀要四七、二〇一〇年三月

⑭ 「防人歌と戦時下におけるその受容」『美夫君志』一〇四、二〇二二年三月

⑮ 「大伴家持」『万葉長歌の表現研究』第一二章（初出一九八四年三月）、和泉書院

⑯ 「水鳥を越前の判官大伴宿祢池主に贈る歌一首」（19・四一八九）において、池主に対して「ますらをを伴なへ立てて」と「ますらを」仲間を誘って、叔羅川で鵜飼をするように促している歌においてもこのような意識が反映していると考えられる。

⑰ 「防人関係歌群の『ますらを』意識―防人文学の形成―」『大伴家持論　――文学と氏族伝統――』第六章（初出一九九四年二月）、おうふう

⑱ 注⑫論文。

（はらだ　なおみ・苫小牧高等工業専門学校非常勤講師）